
古代機械と現代時間

霧零村雨丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

古代機械と現代時間

【Nコード】

N7154V

【作者名】

霧零村雨丸

【あらすじ】

あるきっかけで出会った下級機兵、リンと古代の叡智と名乗るデーター体。その出会いは少しずつ彼らの世界に異変を起こそうとしていた。

始まり？

「……………何だ……………これ……………？」

僕は、奇妙なものを見つけてしまった。

艶消しの黒で塗られた十センチ四方の立方体。

その表面には細く光るラインが何本も刻まれている。綺麗だ。

「……………」

立方体は、台座の上に収められている。

火のついた灯りの先、簡素な台座がある。その上に、堂々としながらも寂しく置いてある。

足を踏み出し地の手ごたえを確かめる。よし、固いぞ。

一步一步を確かめて進むのは骨が折れる。だけど、そうしなきゃ死ぬ可能性もあるからね。

時間をかけて、ようやくたどり着いた。

本当は、こんな所で油売ってないで早くはぐれてしまった皆と合流しなきゃいけないんだけど、僕の冴えない勘が何かを呼んでいる。なんか、もう二度と無いチャンスに恵まれているって、勘が。

僕はその勘に従い、手を伸ばした。機械越しの手触りは硬く、しかし鉄では無い、よく分からない硬さだ。

説明は後になるけど、今僕は『ステラスフォーム』と呼ばれる機械のスーツと言うかアーマーと言うか、そう言った物を装着してるんだ。今回のミッションは調査だったから、いざと言う時の為に装

着を義務付けられているんだ。まあ僕は下級兵だからそんな性能の良い奴なんて貰えず、在り来たりの灰色のボディをした量産型だけだね。

顔と同じ高さに掲げ電気回路の埋め込まれたガラス越しにそれを確かめる。ああ、何というか、魅了されそうだ。不規則なのに綺麗に刻まれたライン。それを誇張するかのような色づかい、そしてこの大きさ。どれをとってもしっくり来る。今の技術芸術でもこれを超える物なんて出来そうにないと思うほどだ。

「う、うわっ!？」

くるくる回しながら六面を隈なく見ていた時だ。突然ラインの光が凄い勢いで輝く。光量調節しても直視出来るものではなく、思わず目をそらしてしまう。

手の中で、分解されていくのが分かる。光の量が増し、四角い立方体はみるみる崩れる。しかし、不思議なことに手から零れ落ちる感覚がない。

分解と共に増す黒の立方体はやがて一際凄い光を放った後、ずっと光が失せた。

「……………ん……………?」

一気に明るくなったもんだらか元の視界に慣れるまでに時間がかかった。慣れた所で辺りを見渡す。別に何とも変わってない。自分を見てみるが、何とも変わっては無……………いよな？

「……………変わって無い。見た目は」

気づくのが、遅かった。

絶対にこんなお宝らしき物を取ったからには、罠は付き物だよトラップね。そうだね。どうしてこんなごつごつ音が鳴り響いているか、って、床が崩れて来ているんだね。

「……だ、脱出しなきゃ!?!」

今更だけど、脱出しなきゃ生き埋めになる事が分かった。

その事実を認識した僕は勢いよく引き返し走る。抜ける床との競争だ。

「うわあああああああああああ!?!」

もう道順なんて覚えて無い!

今は走るだけ!

ひたすら走れ!

だけど普通に考えて抜ける床相手に

「絶対追いつかれる!」

後ろを振り返る。

あれ? 何もないじゃん。

えーと……どうしたことだ?

ああ、そういう事か。もう出遅れだったのか。

「落ちる落ちる落ちる落ちる落ちる落ちます!!」

もう頭の中がパニックでブーストで飛べばよかったものを、がむしやらに体を振って落下してしまった。

1―1話

「えーと……どういう事？」

彼女は考え、困った表情で答えた。

『ごめんなさい……あまり詳しくは教えられないんです……』

うーん、機密情報か……

「じゃ、教えられる所まで」

『分かりました。まずは……』

~~~~~

.....

.....

.....き.....ろ

.....お.....ろ.....き.....ろ.....

ん？そんな声が聞こえる。だけどまだ眠いから起きたく……

「起きろっつてんだろ！」

「はいいい！？」

無理やり引き起こされた。

どうなってるの？

「どうもこうも、すごい勢いで崩壊した遺跡から飛び出して墜落して気絶したんだろ。頭大丈夫か？」

ああ、そうだそうだ。すごい勢いで飛び出したんだった。危ない危ない。

「……よっこらせつと……」

僕は顔を上げ、改めて周りを見る。

どうやら保健室らしい。ベッド気持ちいいなあ。うん。また寝たい。

「寝るんじゃないよアホ！リーダーが担いでくれたんだからお礼を言いに行け！」

「うっ……分かったよ……」

あー出たくないよー

とは言うもののちゃんとお礼はしとかなければいけないので、ベッドを出る。

軽く伸びをし、筋肉をほぐしてから僕はリーダーの部屋に向かう。

~~~~~

今僕は廊下を歩いている。隣には長い付き合いの友達が一緒。
表面上だけでは無い数少ない『親友』と呼べる存在でもある。

「……リンって、男だよな？」

「男って前から言ってるでしょ！」

僕の名前はリン。女と間違えられやすいけど、男。

まあ誰が僕を見ても最初は『うーん……男ですよ？』みたいな
反応するのは慣れて来たけどね。入った当初も何回か性別聞かれた
し、もうここにきてどんぐらい聞かれたんだろう。

僕は鏡を見て自分は男だと認識できるぞ！

「あーなんだろうな……中性的な顔つきと言うか、男にしては柔
らかいよな」

「なんか傷つくんだけど……」

ちなみに親友の名前はコウキ。時々変なこと口走るが根は良い奴だ。

アーマー操縦士としては僕よりは劣るけど、勘が鋭い。今回の遺跡崩落（まさか僕が起こしたとは口が裂けても言えない）もいち早く気付いたのがコウキだったらしい。それが功を成して崩落する前に脱出に成功したと言う。コウキが自慢げに話していた。

他愛の無い会話をしながら歩いて道を進み、僕達はリーダーの住む部屋に着いた。

リーダーは気前がよくて優しいから、人気があるんだ。しかも、見かけによらずほとんどの事がこなせるからもう凄い人。

僕は二回ノックして、失礼します、と言い扉を開ける。

「失礼しま……………した」

思いつ切り昼寝をかましていたので撤退。扉を開けっ放しで寝るとは……………凄い人だ。

~~~~~

お礼は爆睡にはかなわない。何よりも睡眠は大事だからね。僕にはリーダーを起こす勇氣は無いかな。まあお礼は後にして、今日は部屋に帰ろう。今日はもう召集が無いだろう。後はゆっくり本でも

読むなりコンピューターでもいじってよう。

「ただいまーっ」

普通は、二人で一部屋なんだけど僕だけ何故か一人なんだよね。そんなに怪しいのかなあ、僕。

そうだ。ここに持ち込んだコンピューターで自分の機体の確認をしよう。あんな事があったし、整備は終わっただろうけど一応心配だ。

「確か電源はつけっぱなしで画面だけ消したんだよね」

朝のネットでニュース確認していたら召集がかかったから、確かタブだけにして画面を消したはず。あ、サーバーの電源ランプが緑色だから稼働してるね。よし、画面電源ぼちっとな。

画面の電源を押すと、ブンと低い音が成り元の壁紙とアイコンと人が現れた。……………人？

「……………え？」

今、画面の中に女の子がいる。

女の子が、今服を手にとりもぞもぞと着替えてる。

薄いクリーム色の長い髪にしなやかなでくびれのある綺麗な体つきが目に残る。うわあ、おっきい……………

『……………?』

あ、

『……………!?!?』

「い、いや、その、これは、アレだ。違うんだ!」

一拍の間をおいて

『……………きゃああああああ!』

コンピューターのスピーカーから悲鳴が思いつ切り鳴り響いた。

~~~~~

『ええ、本当にごめんなさい……………』

「いいって。タイミングが悪かっただけ……………うん」

まあ色々ありまして会話は出来るようになりました。
コンピューターのマイクで会話出来るらしい。

「うん。……………ところで聞きたいことが多すぎて困るんだけど」

『そ、そうですね……………』

何もかも不確か過ぎる。取り敢えず、名前ぐらいは知っておきたい。

「あの……名前は？」

『名前、ですか？……………』

黙っちゃったよ。どうしよう……………

「あ、い、言えないのなら別に……」

『……………分からないんです』

「え？」

『名前って言う物は分かるんですけど、それが何なのかが分からないんです……………』

参ったな。個体名称も無いのか……

「うーん……………じゃ、さ、君は何者なの？」

『……………私は、まあ、古代最後の祖先ですね。あなたの手に取ったあの黒いアレです』

……………は？

「えーと……………どういう事？」

彼女は考え、困った表情で答えた。

『ごめんなさい……あまり詳しくは教えられないんです……』

うーん、機密情報か……

「じゃ、教えられるところまで」

『分かりました。では……遙か昔、機械文明が栄えた事は知っていますね？』

これは常識だ。かつてこの地では大昔機械と人間の共存文明が栄えていたのだ。それは石版で判明した。僕は確か一回だけ生で見た事あったかな。人型の大きな機械と人間が写っていた。

「うん。当たり前だよ。エンシエントギアライズ古代機械文明だね」

『そして、突如として文明が消え、人類は退化しそしてまた進化を遂げたと言う事は？』

どう言う訳だかさっぱりなんだけど、滅びる事の無いだろうと言われていた文明が突如滅んだのだった。本当に、痕跡も無く、そして跡形も無く突然とだったらしい。証拠すら見つかっておらず、石版もぷつぷつりと途切れているのだ。

「知ってる」

では、

『その情報が、偽りである事は？』

「……え？」

『突如として文明が滅んだ、そんな事など有りません。立派な順序を経て滅びました』

「ど、どういう事!？」

『そうですね……私に記録されているのは、かつて文明の全盛期が過ぎた頃でした。ある時、誰でしょうか。その頃の機械には意思もあつたのです。意思を持った人型機械が言い出したのです。』

「俺達は、人間に利用されているだけだと」

それを聞いたまたある人型機械が便乗し、そしてその連鎖は続き、何時しか、人間と機械との戦争が始まりました。両者とも初めは互角だったのですが、なんせ人間が機械に依存をしていましたものですから武器が機械的な物です。絶対に歯が立つ訳がありません。やがて、人間は圧倒的な量と質に押され、ほとんどの人間が破滅に追いやられました。結果、機械軍の勝利に収まりましたが、同時にそれは滅亡に繋がりました。機械軍も、動力源は人間の使う呪術や儀式の類だったのです。機械軍は、初めて過ちに気づきました。己の愚かさを知った機械軍は、次に人為的に復活させられるまで、半永久的に眠る事を決意しました。そして、機能停止と言う名の眠りについたので。これが、文明が滅んだ真相です』

「……………」

僕にとっては、いろんな意味で衝撃的だった。

今の技術ですら人工知能は単純な物でしか開発する事が出来ず、

人間のような感情を持つ機械が過去に存在したなんて信じられない。けど、目の前にいる存在が悠々と自分の想像を砕いてくれる。

『これが、もし？今？の文明が進めば判明する過去の事実です。しかし、これにはまだ隠された事実が存在します。』

「……………」

僕には、黙って聞く事しか出来なかった。

『戦争中、たった一人の人間と、たった一体の機械が、皆とは違う事を思いました。』

1―2話

『彼らは、町外れにいた機巧師です。機巧師とは、その名の通り機械を巧みに操る事が出来る。転じて、機械を開発する者の事です。』

「……………」

『そして、彼らは？今？に目を向けていました。つまり、過去からして未来の事を見つめていたのです。恐らく、この戦いで人間と機械は一度滅ぶ。そして、再び長い年月を掛けて栄えだすだろうと。未来の人間に同じ間違いはさせない。そんな一人と一体の思いは行動に移りました。戦争から逃れ、ひっそりと、ある物を作りました。彼らの知識や技術すべてが詰まった物です。そう、それが貴方の触れた立方体、つまり私なのです。』

「じゃあ、君は……………本当に……………古代の……………」

『私は、彼らの技術から生まれた、環境に合わせて進化する電子情報体です。要するに私は生きた機械ですよ。今はインターネットから莫大な情報を処理して知識を得ているだけです。……………話を戻しますと、彼らの叡智を惜しみなく注ぎ込んだ？私？は封印され、次に復活する時には、伝えてほしいと頼まれました。……………私の一般領域に記憶されている事は以上です。』

正直、信じられない。

だけど、言われてみれば彼女の話の筋は通っている。

何よりも、不思議な説得感があった。何も確信が無いのに、彼女の言ってることが出鱈目かもしれないのに、不思議と信じてしまう。

「お話……ありがとう………三つ、質問良いかな」

『いいですよ。私の答えられる範疇ならですけど』

「あの、黒い立方体は、何処へ行ったの……？」

『あ、ああ、アレですか……それはですね………』

彼女は何故か顔を逸らし、頭を掻く。

何か言えない事でもあるの？

『それはですね………多分貴方の乗るアーマーと結合しました………』

………

「………えええええ！？」

『どう言う訳だか私にも分からないんですけど、多分貴方のアーマーと結合しています………そのおかげで私はこのコンピューター内に来れたんですからっ』

あ、そうか。僕はあの自分のアーマーとこのコンピューター繋げてたんだ。

だから通信的にこっちのコンピューターに来れたのね。納得。

「まあそうだけどさ………それまづくない!？」

『………実は、私にはセキュリティの掛かっている記憶領域がありま

す。何かのきっかけが無いと開かないようになっていたのですが：もしかしたら関係があるのでは無いかと。私の記憶の一般領域にあの黒い立方体自体の情報が異様に少ないんです。ですが、何にも問題は無いかと！』

「うーん……まあ、じゃあ、信じるとして、次。封印された機械は今もあるの？」

『あります。どこにあるかは特定できませんが、必ず、この地のどこか奥深くに封印されています。そして、外側から内部への人為的な刺激があった場合起動します。そして、おそらく人間が起動するであろうと言う事から、人間の命令に従うシステムとなっているはずです。』

「見てみたいなあ………あ、もしかして崩壊した遺跡の中につ」

『だ・か・ら、私は隔離して封印されてたんです！』

「そうでした……じゃあ、最後。君の名前を考えよう」

『……はい？』

「いや、君っていうのもなんか嫌だし、名前が無いなら考えようかなあって」

『な、名前ですか……』

「これから長い縁になりそうだしね。……うーん………」

『……あの、一つ良いですか？』

「はい？」

『……見ず知らずのさっき知ったばかりの情報体に変な知識を押し入れ、それでも友好関係を取ろうとする。……私には考えられません。どうして怪しまないんですか？』

確かに、機械からしてみれば不思議なことかもしれない。だけどね、

「僕は信じるよ。ぷつぷつ文明が滅びるだなんておかしいと思うし、古代の技術の方が進んでいるかもしれないって思うと、君の言ってる事はつじつまが合うし、……コレだっていう理由は無いけど、なんとなく信じられる」

『……人間って、不思議ですね……私にはよくわかりません』

「そうかな？……よし、決めた。？サラ？なんてどう？」

名前を決めるのは難しい。

結局、僕は髪が見た感じサラサラだったから『サラ』ってとったんだけどね。

気に入ってもらえるかな。

『？サラ？ですか？……サラ……名前を貰った事が無いから良くわかりませんが……良いんじゃないですか？』

「よし、じゃあサラで決まり。……改めまして、僕はリンです。よろしく、サラ」

『よろしくお願いします』

彼女、サラはぺこりと頭を下げ、笑った。

その表情を見ると、僕も自然と笑顔になってしまう。
なんだかいい気分だ。

『……………一応聞きますけど、女ですよね?』

「男だよ!」

2-1話

……わ、分からないぞ……どうすればこの問題解けるんだ……

『……それは、二つの式を連立させて出た数値で出来た式でまた連立させて答えを導くのよ』

……そうか！分かった分かった！納得したぞ。出た数値を入れてまた式を作るのか！

「これで解ける！」

「ん？どうしたリン？ああ、ちょうど良い。今の問題黒板で解いてみる」

勢い余って席を立ってしまった。そしたら先生に指されたよ！
自業自得とはいえ、皆に笑いものにされるのは恥ずかしい！

~~~~~

「お前いろんな意味で目立ってたな。……あ、今日遊びに行くから」

「もう言わないで……」

『分かったからって張り切らないの』

二人からの言いように僕の精神値はもうゼロに近い。

まあ正確には一人と……なんだろう？ 一体なのかな？ よく分からないや。

あの後、僕はサラに敬語で話すのをやめてもらうように願い、サラは自分の携帯端末とマイク付きイヤホンで、一緒に行動する事を要求した。まあそうして、そのおかげで授業が凄く楽しい……いけないいけない。とても楽しく受ける事が出来ています。分かんなかったら教えてくれるし、何より知識が深い。詰まらない歴史の授業だってミニ知識を教えてくれるし、興味深い事がたくさんあって……今考えると歴史でサラに勝てる人なんていない気が……

『私はネットワークに接続してるから他の事も負ける気はしないわ』

……そうでしたー

~~~~~

「ふう〜帰って来たー」

自室に帰って来た。

いつものごとく誰も部屋にはいないが、自分の部屋に立派な住人が増えたのだ。

『学校っていう物は退屈ね。ネットワークが狭いし、どうしようもならないわ』

「まあそうだね……でも行かないと常識が身につかないからね。行かなきゃいけない物なんだよ」

『ふうん……』

今僕はサラと会話しつつニュースをチェックしている。

サラは学校の事が大変御不満なようだなによりだ。学校は詰まらないよねー。

今日のトピックスは一面遺跡崩壊の件についてだ。突如遺跡が崩壊したただの岩山となっている画像が大きく張り出され、怪奇現象だの大嵐だの耐久性だのあれこれの意見が書かれている。……うん。どこかで見覚えあるぞ。

『どこもかしこも私が封印されていた遺跡じゃない』

「……大ニュースになってるね」

あ、まさかこれで遺跡壊した身元が割れて捕まっちゃったらどうしよう。まだやりたい事たくさんあったのに……

『早まらないの。こういう事は大体上層部がもみ消してくれるわ』

「そ、そうなんだ……ん？」

ドア越しにノックする音が響く。来客かな？
とりあえず……

「サラ、一回落ちてて。ばれたらいろいろまずいから」

『了解よ……っと』

コンピューターの画面からサラが消えた。恐らく携帯端末かネットの海に放浪しているんだろう。

僕はノックされた扉に返事をして、ドアを開けた。

「ようリン」

「ああ、コウキね。いきなりどうしたの？」

「はあ？ どうしたもこうしたも今日遊びに行くって言ったじゃねえか」

あ、そうだった。確かに遊びに行くって言ってたねえ。

「まあ何もないところだけど上がってよ」

「どうもーっす」

~~~~~



「……おい、アレなんだ？」

とある地域。リンやコウキのいる基地とは程遠くない。監視塔にて、退屈そうに画面を見ていた二人は奇妙な物を確認した。

「あ？……何だろうな。犬の群か？」

見ると、遠くにいてよく分からないが四脚と大きさ、行動の仕方から犬と判断したのだろう。三匹ぐらいで何かしている。

「犬か。驚かせやがって。……なあ、アレやろうぜ」

「いいぜ。次は俺が勝つ」

彼らは犬と信じ込み、興味の枠から外れてしまった。

ある男がカードゲームを取出し、それを見た別の男もまたカードを出す。

「俺のターン！」

~~~~~

「最近お前マイク付きのイヤホンしてるよな。なんで？」

「あ、ああ……ファッションだよファッション！」

「ふうん……」

僕とコウキがベッドの上でカードゲームをしながら会話していた時だ。突然けたたましく警報が鳴り響く。その後、音声による全体放送が入る。

？緊急事態です。B地区の住宅地にて何者かの襲撃を受けました。詳細は不明。A、B、C、D班は調査及び討伐、他の班は住民の安全を確保してください。繰り返します。緊急事態です。……？

「な、何だ何だ!？」

「襲撃らしいな。俺は先に行くぞ！」

コウキが部屋を急いで出て行った。こういった時だけ焦らず行動できるコウキが羨ましい。

それと同時に、サラがコンピューターに現れ僕に告げる。

『私はリンの機体に移ってるわ』

そう言い残してパッと消えた。そうか、サラも行く気なんだな。あまり情けない姿は見せられないなあ。

「じゃ、行きますか!」

僕は部屋のベッドの壁を手で触る。べたべた触ってるうちに見つけた。一部だけ、ひっくり返り取っ手となる部分が出て来るのだ。

取っ手を掴んで勢い良く開けて僕は飛び込む。中は滑り台形式で結構スリルがあっっておもしろい。

出てきた先は戦闘更衣室。ここに機械内での自分の身を守るプロテクトスーツに着替え、直結している装備室に向かう。装備室で『ステラスフォーム』を装着し、後は車両なり飛行機に乗り込み現地に向かう。

今回は住宅地と割と近いので車両での移動だけど、どうしてまた奇襲なんて起きたんだ？監視塔があるはずだぞ？

「詳細は不明ってのも気になる」

まあ早い話が現地にいけっことで、急いで着替えよう。

「緊急事態って……うわああああ更衣室間違えましたサーセンツ！

……ってリンじゃねえか」

「だから僕は男だよ！」

~~~~~

「リン。今回の事件についてどう思う？」

「は？どう思うって？」

「分っかんねえかなあ。おかしいと思わないか？監視塔をくぐって奇襲だなんて。どうしてくぐれたんだ？人の目も監視カメラもあったはずなのに」

「ああ……どうだろうね」

「着いたぞ。降りろ」

今回の事件について不審な事を思うのは僕だけじゃ無かったようだ。

それはサラも同意見らしい。途中途中通信が聞こえる。今は監視塔のシステムに入り込んでみているそうだ。見つからないようにとは言っておいたけど、心配だなあ。

『監視塔のシステムに異常は無いみたい』

あ、帰って来た。

「んじゃあ、俺達B班は東と中央ブロックを担当する。……行くぞおお前ら。今回は恐らく落とし穴みたいなギミックは無いだろうが命がかかわる。皆気を張っていけ。特にリンは気をつけろよ」

「分かりました」「うっすおkっす」「りよ、了解です！」

「とりあえず情報収集と偵察だ。各自散開し個別に行動しろ。何かあったら俺に知らせるように。ある程度の事は自分で決めてもいいが迷ったら俺に連絡しろ。良いな？」

「「了解です!」」

「あい、じゃあ解散」

~~~~~

「特に変わった所って無いなあ。……」

『そうね。見た感じ壁の質感一つ変わって無い』

東エリア住宅地。すでに大勢の人々が避難しており、正にがらんどう状態だ。

通信の独り言などがバレたらいろいろアレなので今はちょっと強引に単独行動をとっている。大丈夫。落とし穴は無いから。うん。

『……リン、ちょっとそこの壁に隠れて。何か居た気がする』

「は、はい」

近くの住宅地の隙間に隠れて、様子を伺ってみること五分。路地からそれが出てきた。町を襲った張本人だ。

僕にも見える。犬の形をしたような、てか犬。でも、何かおかしいよ……おかしいな。うん。

『ッ！』

その形を認識したサラが息を呑む音が聞こえる。なんだなんだ！？まさか何か心当たりでもあるのか！？

「サラ、どうしたの？」

通信機能のマイクで聞いてみる。サラは何度か頷き、

『あれは……間違いはないわ』

そう言って、迷いなく事実を僕に告げてくれた。

『……エンシエントマシンド木カートビースト古代機械の斥候獣』

2-2話

「え、な、何？ えんしえんと……なんだって？」

エンシエントマシンドネカートピースト
『古代機械の斥候獣。いわば斥候隊よ』

「せ、斥候？ 偵察するアレ？」

『その斥候よ』

ちよつと待って。いろいろおかしいぞ。

「今エンシエントマシンドルって言ったよね？ アレ古代の機械なの？」

『ちよつと私も信じられないんだけど、そうみたい。駆動音が聞こえるでしょ？』

確かにだ。耳を澄まさないで聞こえにくいギアの噛み合う音やモーターの音、蒸気の排出音が聞こえる。間違いなく機械だ。今の技術じゃあんな精巧になんて作れない。

「生で見るのは初めて。でもなんでいるの？」

『……分からないわ。眠りに着いたはずなんだけど………』

僕が観察していたその時だ。犬が気まぐれにこちらを振り向いて、目が合ってしまった。

犬は僕達に気づき、遠吠えを上げる。機械なのに声が出るのかよ！

「バレた！」

隠れていても仕方が無いので僕は表に出て装備の銃を取り出す。
うわっ、三匹に増えやがった。

犬は唸りを上げて走ってこっちに向かってくる。速い！

「く、来るなあああ！！」

ちよつと腰が引けてるけどそこは指摘しないでほしい。なんせこ
ういうの初めてだから！

装備のマシンガンっぽいのを犬辺りに向けて乱射して撃退を試み
るが、当たってるのか当たって無いのかわからない。

『全然当たってないわよ！もっと狙いをつけて！』

「分かってるよ！」

犬がもう目の前だ。パニックになりかけて形振りなりふ構わず銃を撃つ
た。

たまたま一番前の犬に何発か連続で当たりひるんだ。

「とりゃあああああ！」

掛ける声が違うと思うけどそれも勘弁してほしい。ホントどうし
ようもないんだって。

ひるんだのを隙に僕は全力で引き鉄を引き続け弾丸を吐き出た。

下手な鉄砲も数うちや当たる。犬に当たった弾丸は少ないものの、
向こうも痛手を負ったらしく声を上げて撤退していった。


~~~~~

「はあ……はあ………」

緊張が解けたせいで足に力が……入らない。  
情けない事に僕は尻もちついて倒れこんでしまった。無理もない、  
って思うとますます情けなくなる。

『とりあえず、何とか撃退は出来たわね』

「う、うん……」

初めて命の危険を感じた。

このぐらいできるだろうと思っていた自分を舐めていた。  
何も出来やしないじゃないか。今日はたまたま運が良かっただけ  
だけど、次にこんな奇跡が起こるとは限らない。雲も実力の内なん  
て言うけど、そんなのまっぴらごめんだ。運はただの運でしかない。  
そんなものは実力なんかじゃないんだ。

「だ、駄目だ……立てないや………」

『こういった戦闘は初めてだったのね……』

ステラスフォーム内、僕は汗びっしりで息も上がってる。  
これが訓練の結果かあ……

「おい、大丈夫かりん！」

「リ、リーダー……」

向こうから、リーダーやコウキ、他のメンバーも大勢見える。それと同時に通信も聞こえる。

そういえば通信が使えた事を今更ながら思い出した。

使って相談してればいくらか問題は別の方向に傾いていたかもなあ。

「お前、いきなり通信が切れたと思ったらいっくら探しても出なかった犬が凄い勢いでお前の方に行くんだもん。大丈夫だったか？」

「ま、まあ、何とか……おかげで銃の弾薬が尽きかけてるけど」

リーダーの差し伸べた手を取り、震える足で立ち上がりながらコウキに説明する。

ステラスフォーム内だから外からじゃ分からないけどまだ震えてるさ。

「色々積もる話があるだろうが、まずは帰って腹ごしらえだ」

その言葉が出るや否やリーダーの通信から腹の音が聞こえた。  
今日は、もう帰ろうじゃないか。

~~~~~

「ポテト美味えええええ！」

「あ、僕のポテト摘まんだな！？」

食堂でおばさんがハンバーガーを作って待っていてくれた。現在僕はそれを頂いております。

ハンバーガーは肉とソースの相性が絶妙で、レタスがその味をさらに引き立ててくれる。ポテトも揚げたてで塩がきいていて文句なしの美味しさだ。

「んで、リン。後で事情聴衆だから残れ。……情けねえ事に接触出来てるのがお前だけなんだ。済まねえな」

「は、はい」

部屋に帰りたいがリーダーの命令だ。頭まで下げて貰ったら断る事なんて出来る訳が無い。

ちょうどハンバーガーもポテトも食べ終わったしコーラも飲みきったから行くとしますか。

~~~~~

「今日は盛りだくさん過ぎて疲れた……」

『ああいった奇襲は初めてなの?』

「いつもはもっと上の人が出るんだけど、今回は別の方に出張しちゃっててその積み重ねで僕達に回ってきちゃったんだよ……」

『それはなんとも……』

ベッドの上で大の字になりながらサラと会話中。

いや、まさか聴衆であんな時間喰うとは思わなかった。確かに目撃者とはいえ、何も雌か雄かまではいらなideしょ……

「ふあゝ……」

『……リン、ちょっと聞いて』

「何?」

『……アレが古代エンシェントギアライズ機械文明の物って言った?』

「……………言っていないけど……」

当たり前だ。今そんな時に古代機械文明の物ですって言ってはいそうなんですかって頷いてくれるわけが無い。色々混乱を呼び起こしたくは無かったので言わなかった

『よかった……』

ホッと胸をなでおろすサラ。安堵の表情が可愛いなんて思っ  
てないぞ。

『……何かがおかしいわ。古代機械エンシエントマシンドールが目覚めてるって言う事はもしかすると他の機械も目覚めてるかもしれない。それに、誰の命令で斥候犬スコートドッグが操られてるかもわからない。注意が必要よ』

「う、うん」

そうだね。もし話が本当なら、いや僕は信じてるんだけどね。本当なら、すでに人間との接触が発生し服従しているのだ。その人間の命令でこの住宅地の奇襲となると何か怪しい事でも企んでるかもしれないし、たまたま本能的なもので襲ってきたのかもしれない。いずれにせよ、警戒は引き上げないとまずい。

『だから……その為にも、リンはせめて射撃の腕を良くしなさい。あとはパニックにならない事』

「はい……」

### 3-1話

「情報はそろった。……想像以上の働きだ。さすが古代機械文明の機械マシンドールと言ったところか」

巨大な画面の前に座る男は、傍らに待機する犬に目をやって呟いた。

その犬はまるで生きてるかの様な形を持った、立派な機械だ。足の関節、そして口から洩れる水蒸気がそれを証明してくれる。

目の前の画面。そこに大きく中央に映し出されているのは一つの基地。その映像を取り巻くように住宅街やはずれの山などの地形のデータが細かく表れている。

「軍政を牛耳っていたあそこも既に我が軍の手に落ちたのも同様」

男は手にワイングラスを持ち、側で待機している男にワインを注がせた。

注がれた深紅に染まるワインを一口飲んで、男は画面に映る基地に向かい言い放つ。

「我が？機械魔女？マシンスフローレンに敵は無い！」

~~~~~

「も、もうダメだあ……………」

『お疲れ様』

コンピューターのスピーカーからサラの声が聞こえる。こんなにもベッドが愛おしいとは思わなかった。

前の事件以来、僕は学校の放課後に銃撃訓練を入れることにした。改めて自分の身の危険を感じたからだ。

射撃訓練に狙撃訓練、弾薬の装填や弾の作り方、更には呼吸の仕方までなど盛りだくさん過ぎて過労死しそうだ。

時刻はすでに夜九時を回っている。今日は特に見たい番組も無いし、シャワーを浴びて寝ますか。

「ふわふわわ……………今日はもう寝る……………」

『そう。私は巡回してくるから。おやすみなさい』

「おやすみ」

~~~~~

「いいか、お前たちは選ばれし先鋭だ。これから最重要任務を総司令官のこの私が直々に下す。今回は、あの基地の奇襲と占拠をしてもらう。開始時刻は零時。到着時間を一時間とし各自の判断で奇襲、占拠を行い司令部からこちらに通信を飛ばせ。何か質問は？」

総司令官である男に対し真っ先に手を挙げたのが最年少と思われる金髪の少女だった。

「一時間じゃ絶対着かないと思う！」

「そうですね。この距離からだとして二時間三時間はかかると思います……」

少女の質問に隣に立っていた長い黒髪の女が同意し、恐る恐る男に聞く。

その男は顔を歪めてニヤつき、

「何を言ってるのかね。？アレ？を使えば十分だろう？」

その一言で、たった一言で集められた先鋭達はどよめいた。

彼女たちは彼女たちで何かを相談し、ガッツポーズを作る者もいればため息をつく者もいる。

その中、やはり金髪の少女が興奮しながらもう一度総司令官に聞いた。

「え！？？アレ？使っていいの！？」

「もちろんだとも。今こそ使う時が来たのだ」

男はさらに続ける。



「強き者はその力を一回しか使わず、されど惜しみなく使う。今こそ、この基地を占拠するために力を使う時が来たのではないかね？」

「じゃ先に調整もかねてスタンバって来るから!!」

男の話を聞かず早足で駆けて行った。

それを見た長い黒髪の少女はため息を一つ付き、男に別の質問をぶつける。

「万が一、拉致られたらどういたしますか？」

「なあに、心配はいらない。お前達の装備は一括でこちらで管理してある。万が一が起きたら緊急電波を飛ばす機能がある。それを飛ばしてくればこちらで機能停止にできるから問題は無い。……ま、お前達が拉致られる様な事をしなければ良い。それまでだ」

「……分かりました。では私もスタンバイしてきます」

長い黒髪の女に続き他の女もそろそろスタンバイをすべく部屋から出て行く。

誰も居なくなった部屋で男は高笑いをした。その声はいつまでも響く

~~~~~

「……………今回、私は本当にこれでよかったのかしら」

機殻化された箒に跨り、またが夜空を駆ける。

それはまるで空を飛ぶ魔女の如く。

黒髪の女は、呟いた。

その儚き声は夜の風と共に流されていった。

~~~~~

『んんふっふふーん……?』

深夜一時十分前。サラが管制塔に入り込んで見ている時だ。遠方に、何かを確認した。

それは黒い点でしか見えないが、何かが飛来している。カメラの角度と他のカメラの情報も合わせ計算し出すとこちらに飛んできている模様。

『嫌な予感がするわ……どうやら寝ちゃってるみたいだし』

サラの言うとおり、監視塔の番を務めてる人は仮眠を取ってるみたいだが目覚ましがセットし忘れていると言うのが現状。

『……リンに先に回ってもらおうかしら……』

サラはそう呟き、管制塔からログアウトした。

~~~~~

「……見えてきたわ」

彼女たちの向く先、基地が見える。

それはリンやコウキ、サラなどがいる基地だ。

「これより、奇襲及び占拠を行います。A班は外側から派手に攻撃を行い、気を引いている内にB班C班で突撃を行います」

耳にある通信機構に手を当てインカムを入れ、連絡を取る。

マシンズフローレン
「機械魔女軍、行動開始！」

その声と共に、魔女をイメージした黒の装甲で身を固め機殻化^{カウリング}されている箒に跨った魔女軍は散開した。

3-2話

『リン、起きて。ちょっと大変なのよ!』

「……………んー……………?」

こんな夜中に起こされてしまった。
どうしたんだサラ? 良い子はバリバリ寝る時間何だけど?

『何かが基地に迫っているわ。監視塔のカメラから確認した』

「……………マジで?」

その発言でバッチリ目が覚めました。
とりあえずもうちょっと詳しく説明してくれない?

『詳しくと言っても、向こうから集団で黒い影がこっちに飛来して
る事ぐらいしか見えなかったわ……』

「……………うーん……………と、とりあえず万が一の為にプロテクトスーツに
着替えに行こう」

サラを携帯端末に移し、僕はベッドの側の扉に手を掛け勢い良く
開けてその穴の中に入って行った。

~~~~~

「さ、寒っ」

プロテクトスーツに着替え、外に出て調査するべく外に出たのは良いが……軽く寒い。手が震えちゃう。銃の照準が合わせ難くなるね。

『何気このスーツ通信機能まで付いているのね』

「隠密活動や狭い空間での作業だと『ステラスフォーム』使えないからね。そういう時の為らしいよ」

端末で適当に会話をした後、基地の外を見まわってみる。

かと言ってもそんな入念に探索するのではなく適当にぐるーっと一周してみても何も無かったら寝る予定だ。

このまま、何も起きなければいいなあ。

「……………ん？ サラ、あそこに誰がいるよね？」

『門番じゃない？』

にしては不思議だよね。

なんで座ってるんだろう？

しかも俯き気味だし。

「……………げっ」

近づいてまじまじと見てみると首にあざが出来ている。  
これはもしややられたのでは無いか。

『ッ！逃げて！！』

「は！？」

口で疑問詞を放ちながらも足は勝手に動いてくれた。  
勢いよく走って基地の扉の死角にダイビングし受け身を取って反転。基地の様子をうかがってみる。と、同時に爆破音が鳴り響いた。

~~~~~

「な、何なんだ一体！？」

茂みに隠れてサラに聞いてみる。いち早く気付いたのだから何か知ってるかもしれない。

『扉か壁が爆破されたと予測するわ。まずいわね』

「ほ、本当に奇襲だ……た、助けに！」

この状況に啞然とする事しか出来ない僕。

こんな時に何も出来ないのが悔しい。

『今は隠れている事が正解よ。ここで調べに行ったらみすみす捕まるわ』

「だ、だけど……！仲間が！」

『いい加減落ち着きなさい！！』

サラの一喝で僕は気を取り戻した。

今、感情に身を任せて突っ込んで行ったら恐らく侵入した奴らに捕まるはずだ。

しかもこの夜中の襲撃だから、最悪動けるのが僕だけかもしれない。

「……悪かったよ、サラ」

『危険な時こそ落ち着きを取る。鉄則よ』

「分かった。……誰かいるね。こっちに向かってくるからここで隠れてるよ」

『了解』

向こうから人が来る。しかし、それは明らかにこっちの基地の人じゃない。

何か棒のようなものを携えた、とんがり帽子に広がっているスカートが目立つ。スカートは恐らく機械などで出来ているようだ。まるで見た目が

「…………魔女……………」

『本当に魔女みたいね』

お、話し声が聞こえるぞ。

「そろそろ基地内占拠出来たんじゃない？」

「そうね。そろそろ放送掛けられるんじゃないかしら？降伏しなさいって」

「そうすればまあ多分隠れてる奴らも出るでしょ。アハハ」

『……………』

「……………最悪だ……………」

魔女たちはこちらを気に留めもせず通過して行った
思ったよりも早く最悪の事態になってしまった。
もう基地内には入れない。あの魔女の軍勢に乗っ取られたんだ。

?—————?

その考えに追い打ちをかけるように、基地の発声器からノイズが

入る。これは、放送が入る直前のホワイトノイズだ。

「……えー、皆さんこんにちは……え？なに？挨拶が違
うって？いいじゃない別に。あー、で、今、この基地を占領しまし
たのでー、外に隠れてるものは中央のグラウンドに手を挙げて集ま
りなさいって絶対夜だから外にいないよね。うん。まあでもいた
ら出ることー。以上！？」

「……ずいぶんと軽いね」

『そのぐらい余裕って舐められたものね』

サラは少しの間黙り、

『私達がバレるのも時間の問題だわ。多分今向こうは本拠に連絡を
入れたはずだから迎えが来るわよ』

「まずいな……何か手は………」

その時だ、迷惑にも通信機構が耳元で鳴り響いた。うおい！バレ
たらどうするんだよ！

と思っても仕方が無いのでとりあえず出してみる。

「はい、こちら下級兵のリンです」

『――繋がった！接続に成功しました！一人だけ無事なようです！』

「ちょ、ちよつと？話が見えない」

応答を取った瞬間電話越しに声が鳴り響いている。あれ？占拠されたのにどういう事だ？

『あーごめんごめん。今どこにいる？まさかグラウンドにはいないよね？』

「はい。えーと……扉に隠れてます。……ってだからいったい誰ですか！？」

『この通信やってる人。……説明が長くなりそうだから今から指示するところに来て。一回しか言わないわよ。異論は認めないからね？』

良くわからないが基地の人らしい。今は信じるしか無い。
手がかりがナッシングでは手のつけようも無いからね。

「は、はい。どうぞ」

『えーとね……今どこら辺？』

「はい。東口のゲートに」

『そうすると………いい？今からキミは100数えて。そしたら、中に入るとすぐ右に曲がるでしょ？そこの曲がり角の床を思いつき

り踏んで』

「は？え？どういうこと？」

『時間がまずいわ！切るね！』

通話終了のあの音が鳴っている。

ぬう、意味が分からないぞ。あ、いや、やる動作の意味は分かっているんだけどどうしてそんなことするかがさっぱり……………

『今は信じましょ。カウントするわよ。1、2、3、……………』

3－2話（後書き）

後編に続く……○―1、○―2に前篇も後編もクソもあるかっていうのは御愛嬌で（え

3-3話

「えい！」

タイル床の右端あたりを思いっきり踏んでみた。
すると…

「お、う、あ、あああああああああ………」

まさかの床が一回転した。

物理学的に考えて、押したところが押されて回るよね。
それって僕が落下するって事になるよね。

~~~~~

「……………あああああだっ！」

長い滑り台のようなトンネルを半ば落下感覚で滑った先、垂直落下で通路に出た。お尻が痛いです。

お尻をさすって立ち上がり、前を見てみると蛍光灯が照らす一直線の無機質な廊下の先に扉がある。

「……………ここで合ってるのかな？」

『多分』

てか絶対ここだと思う。

「行くしか……無いよね」

『行ってみましょう』

〃  
〃  
〃  
〃

扉の先の室内にて。

「なにげに綺麗で広い……」

『通信機構の機械がいっぱいね』

興味深く見渡していると、

「あ、キミがさっきの通信に出てくれた子？」

「あ、そうです。僕がリンです」

「よかったよかった無事に来て。うん」

真ん中の席に座っていた一番偉いと思われしき女の人はこちらに振り向いて僕達を確認すると確認を取るように聞いてきた。

電話の声とも一致し、本人だと認めてから女の人は一回手を叩き、  
「まあ話が山積みだから、一回そこら辺に座ってて。話はそれからよ」

先ほどとは打って変わって真剣な目つきで僕に言った。  
真剣なのは分かるけどどう見てもソファの前にあるテーブルにはお菓子と飲み物が置いてあるんだけど……  
これが無かったらこよかったんだけどなあ……

~~~~~

「……で、そう言う訳なのよ」

「大体把握しました」

話を簡単にまとめると、もしもと言う時の為に司令塔と通信及び電子機器塔をこの基地内の設備とは別に行っているらしい。

司令塔が乗っ取られたり様々な事に対応するべく『ステラスフォーム』との通信とかは可能にするためだ。前に司令塔に案内された

時に機械を見たけどって聞いたらあの機械類はすべて補助程度の機能しか持っていないんだってさ。

『画期的過ぎてびっくりだわ』

「そして、まさかの事態が起きたんですけど場合が悪かったと」

「そういう事。……監視塔の奴らも悪いんだけど、何より音源探知に引っ掛からないのが凄いわね」

「え？カメラの映像映し出されないんですか？」

「いやあ……通信機能あそこと悪くてさ……」

災難の降りかかりまくりだ。

通信が悪くカメラの映像がノイズが多くて認識できなかったと。

まあこんなことでうだうだ反省点を言っても仕方が無い。

この最悪の状況、動けるのは僕（とサラ）とここの通信担当のお姉さんと情報処理担当のお兄さん三人しかない。対策を考えなければじきに発見されてしまうだろう。

「どうしようかしら？このまま軍から逃げちゃう？それとも降伏する？」

「……それも良いかもね」

「……え？ちょ、ちょっと？もちろん冗談よね？」

「どうしようも無くなったらの話ね」

「……………」

押し黙られても困るんだけど。

でも、これはあくまで最後の手段だ。絶対にこれを使わない方法を見つけ出さなければならぬ。

「ああクソッ！あと少しで突破できるってのによお！」

「駄目だ、セキュリティの壁が高すぎる」

「うわーんどうしようもないよーなんでだー……」

男たちが突然声を荒げた。おお、いったいなんなんだ？

セキュリティとかなんか怪しげな単語が聞こえますが………まさか、

「そのバカ三人がハッキング頑張ってるのよ。さすがに最深部は無理だっつーの」

「最深部？どっかまで見れたんですか？」

「ええ、あの奇襲に來た奴らの装甲は向こうで制御が可能なんだってさ。そんなこと知っても入れないっつーの」

その時だ。今までほとんど黙っていたサラの声が通信機器から聞こえる。

『……今回襲ってきた軍のお偉いさんの人について、何か噂なんて聞いた事ある？』

「うーん……僕は無いな」

小声で答え、僕は聞いてみる事にした。

「すみません。何かそのお偉いさんの噂とかそういうのって聞いてませんか？」

「え？……あー………そういえば、とっても頭が切れるってのは聞いた事ある。後、いかつい」

「頭が良いのと、いかつい、ですか……」

内心、そんなこと聞いてどうすんだろうと思っているけど、サラはありがとって言いまた黙ってしまった。ほんとにどうしたんだろ。お兄さん三人は懸命にコンピューターの画面とにらめっこしているし、お姉さんはソファでお菓子食べてるし、自分がどうしたら良いか分からなくなって来そうになった時だ。

『……………リン、この状況を覆してみるわよ』

「……………は？」

いきなり突拍子も無い事を言い出して思わず声が出ちゃったじゃないか。

なんとかお姉さんとお兄さん三人に言い訳して、改めて小声で聞く。

「……どういうこと？」

『恐らく、その向こうの指揮を執っている奴は頭が切れるのね。しかも、装甲がコンピュータで操作できると。そこから考えられるのは、もしもその奇襲している奴らが襲いに行った先で捕まったらどうすると思う？』

「え、そ、そりゃあ、もう、諦めるしか……」

『そうすると、装甲の情報が漏れるから後々痛い目に合うでしょ？』

そうだ。すると敵軍の装備データが分かっちゃしまい、対策とか立てやすくなっちゃうね。

そのためにも策を取らなきゃいけないと。

『だから、もし捕まったとしたら装甲をパージするなり向こうで遠隔操作を取ると思うのね。』

「まあそうするよね……」

ある一つの考えが浮かんでしまった。

ま、まさか……そんな訳無いよね？

『で、私達がするのはその遠隔操作を乗っ取るのよ』

なんだろうか。僕はため息しか出ない。

どうも古代の人は考える事が違うね。さすがサラと言っちゃうよもう。

「はあ……無茶ばかりだね」

『楽しそうじゃない?』

「はしゃぎ過ぎて捕まらないようにね」

『エンシェントプログラム
古代情報集合体を甘く見るんじゃないわよ』

そんな事を言い出すサラはほっついて、僕はコンピューターとにらめっこしているお兄さん三人に呼びかける。話聞いてくれるかなあ。

「あの……すいません、ちょっといいですか?」

「んだよ何か用か?」

うう……怖い……

だけど今はこらえてやらなきゃ

「……今から、この状況を覆そうと言いましたらどうします?」

「ああ？てめえ舐めてんのか？どうしろつつんだよこの有様でよろ？」

「ごめんなさい、一回落ち着いて下さい。お願いします」

「おいてめえ喧嘩売ってんのかコラア！？」

その怒声に僕は首をすくめる。

話しかける相手が間違ったよね。いやあ、三人同時に反応してくれるかと思っただけだねえ……

「見苦しいぞ、アクティス」

「ああ？テメエは黙っとけやイド！」

今更だがあの不良っぽいお兄さんの名前はアクティスで、メガネをかけた知的そうなお兄さんはイドと言うらしい。

そのまま口喧嘩が勃発してるが、そんな中もう一人の、最年少と思われる男の子が僕の方に近寄り、

「まああの二人は気にしないで……で、まさか何も策無しでこんなことは言っては無いよね？」

「う、うん。……ちょっとコンピューター貸してくれるかな？」

「いいよ」

と言う訳で、アクティスとイドをよそに僕はコンピューターを借りる事が出来た。

ふと後ろを振り返ると……あれ？お姉さんいないし。

「ん？あれ？エラ姉さん居なくなったね。トイレかな？」

あのお姉さんはエラと言うのかー。

そんな事は今は別にいい。男の子の気がそっちに向いてるうちに僕はサラに指示を出す。

「サラ、無茶は禁物だからね」

『ありがとうリン。音声だけは通じるように細工をして置くから。じゃ、繋げて』

「了解。……あの、君、」

「僕はウィリアム。ウィルでいいよ。で、何？」

「ああ、じゃあウィル君この携帯端末と繋がられるコード持ってるかい？」

「お安い御用さ。ちょっと待っててね」

彼、ウィルことウィリアムは近くにおいてある箱の中から無造作に一本のケーブルを取出し、幾度か確認してから持ってきてくれた。何故瞬間的に見て分かるのかが不思議だ。

「伊達に機械マニアやってるわけじゃ無いからね」

「す、すごいね……接続完了っ」と

最後はサラにも意味する言葉を言う。

サラは最後にウインクを残して端末から消えた。
そして、通信機械を味方にしたサラは通信機能で僕に伝える。

『中々の性能よ。これなら楽しくいけそうだわ』

「よ、よかったね……」

『その男の子に莫大な情報を流すから重要機構は私がマークするか
欲しい情報を選別して頂戴って伝えて』

分かったよ。

「ウィル君。今からやるよ。莫大な情報を流すから欲しい情報と言
うか重要そうな情報項目を選別して」

「?……まあ、分かった」

僕は席をどき、ウィリアムに譲った。

僕はアクティス、イド、ウィリアムの使うコンピューターの奥に
ある巨大スクリーンに目をやる。

そこに、情報体のサラがいる。

さあ、後は指示するだけだ。

ここはかつこよく行こうじゃないか。

「……ミツション開始!」

もちろん小声です。

その声を待ってたかのようにサラの声が返って来る。

『了解よ!』

3—4話

「あ、エラさんお帰りなさい」

「ただいま！ってどうして私の名を……………」

予想通りだね。キリッ。

見事に固まっちゃったよ。

いや、まあ、この現状を目の当たりにしたら大体の人、特に通信とか情報関係に詳しい人だともっと固まるよね。

今、巨大なスクリーンにどんどん相手の軍の情報がずらずらと並んでいくんだからね。

物凄い量の情報を解析してるし。

時々前のお兄さん方達から「うっほう！いい女ばっか！…………いけねえ、仕事や仕事！」とか「ふむ…………音響探知の謎が解けた…………！」とか「ハハハハハ！このウィリアム様の手に掛かればチョロいんだよ！」とかもはやそれぞれ個性的過ぎる事を吐きながら凄まじいタイピングを繰り返している。

これを見たエラの一言。

「…………な、なんなのよこの現状おおおお！？」

~~~~~

とりあえずエラには経緯をきっちり話しました。もちろんサラの事は隠しています。

だから上手く説明するのが大変で、ホントにそのことに関しては何も聞かないで下さいのgori押しでどうにか通すと全く持って納得をしていなかったが、この際緊急事態だと言うことで見逃してくれた。

『洗い流し完了。今から内部機構にアタックを仕掛けるわよ』

「分かった」

『接続は？ s y s t e m / f r ? k e n ? でね』

「りょーかい。……皆今から？ s y s t e m / f r ? k e n ? に切り替えて。総攻撃しかけてこじ開けるよ」

その声に三人のやる気の入った返事が返って来る。  
さて、舞台は整った（っぽい）。

「今から逆転を狙う。……開始！」

？おう！？

その声はサラも含め、完全に一致した。

~~~~~

「……ん？」

「あ？どうした？」

管理室で男たちが話し合っている。

「ああ、ファイルがちょこっと入れ替わっててな。支障は無いんだが」

「弄ってたまたまずれただけだろ」

「まあそうだよな」

本当は、弄る事なんてあまりないんだが、手が滑ったんだろう。まあ気にせずぼちぼち作業してくか。

~~~~~

『潜入成功。まずは全てのシステムを統括するシステムデータを書き換える。そこから降伏勧告を促すわ』

何となくわかるけど、こっからは解説はいらなそうだ。僕が聞いても分かんないし。

報告の省略を伝えると、自分の携帯端末からサラの音声が全く聞こえなくなった。

全てをむこうに回しているのだろう。

僕は、ただ祈るしかなかった。

~~~~~

「……………！？緊急事態です！電気供給炉システムの操作が応答しません！！……速報！倉庫の警備システムが異常！操作が出来ませんッ！！」

「どうなってるんだ！？制圧したとの情報伝達が来たではないか！！」

マシンスフロレン
？機殻魔女？の本拠、
エーデル『魔山』では緊急事態による混乱が渦を巻いている。奇襲先からの思わぬ反撃だ。

基地と情報通信塔が同一と見なしていたのが間違いだった。向こうは、基地と情報通信塔を隔離していたのだ。

「ですが、最深部の攻殻制御機構までは突入してない模様です!」

「はッ、今の技術で三百年はかかる新セキュリティシステムがあるではないか!それで引き付けている内にこちらから妨害と逆探知、情報通信塔の場所を割り出せ。制圧しろ!」

「了解!指令を出します!」

そうだ、こちらには古代技術を応用したセキュリティがあるではないか。

向こうはどうせ『今』の最新技術でも駆使しているんだろう。こちらには『過去』の技術があるのだ。

セキュリティの固さはこちらのコンピューターで実証済み。奇襲先の方が若干性能が高いだろうが許容誤差範囲内だ。

「ふむ、無駄な足掻きと言う物だ!」

この時までには、そう思っていた。

~~~~~

「……埒が明かないわ」

巨大なセキュリティの壁の前、サラは見上げる。

電子世界ではセキュリティプログラムは壁に見えるらしい。

壁と言う名のデータを何周しただろうか。もう二万から数えていない。

その時だ。

「……………?」

壁に薄らと変な紋様が刻まれている。

何処かで見た記憶のある形……いや、最近見た記憶では無い。遙か彼方にメモリーされた領域にあるのと似ている。

「うーん……………」

詮索を掛ける事数十秒、すぐ閃きたった。

これは、サモナー式暗号に似ている。この手は良く半永久ループに陥りやすく、さらにループしていれば解けない事は無いのだが、それこそ何万年も先の話。なんとも嫌がらせな暗号である。

これはその劣化複製版だ。せいぜい回った所で三百年で解けるだろう。

「だけど、そんなめんどくさい事なんてしないのよ」

この手の暗号は、穴があるのだ。

サラはちゃっちゃかその穴を探しに行った。もう三千周ぐらいは

必要かなと思いつつ。

~~~~~

「残り二百九十九年だど？一年早くさせられたのか。全く持って向こうのコンピューターの性能は恐れ入る」

総司令官は画面に映る時間を見ておどけて言い渡す。調子に乗った男がそうですね、と笑いを飛ばしたりなど全体的な余裕が見られるようになって来た。

更に、向こうの情報通信塔の場所が割り出せたとの報告も入って来た。

侵入経路と制圧はそっちで考えて伝えておいてくれ、そう言った指令を渡し、再びワインを口にする。

「何度も言おうじゃないか。無駄な足掻きと言う物だよ」

酔いが軽く回っているのかちょっと大きめの声で叫び、大笑いをかました。つられて、他の制御担当の人もつられて笑い出す。

その笑いは、水を撃ったように静まり返った止まった。

目の前の巨大モニターに映し出されるセキュリティ突破予測時間に異変が起きた。

？セキュリティ突破予測時間、残り、10分？

完全に、時が止まった。

グラスが手から滑り落ち、ワインが飛び散った。

~~~~~

「よっしゃああああ来たアアアアア！」

「突破、成功……だと………！？」

「今まで一番なうが楽しいよおおお！……！！！」

ほう、と息が漏れる。

サラが、突破してくれたのだ。

途中何度か画面が停止したこともあったが、なんとか切り抜けてくれた。



緊張のあまり、後ろにあるソファに座りこんでしまった。  
隣のエラさんも一息ついてソファに座りなおした。

『やられた。逆探知で場所が特定されたわ！今ハッキングしてるけど万が一に備えておいて！』

### 3－5話（前書き）

この話自体はこれで最後です

### 3-5話

「残り7分……何としても見つけなさい！」

魔女攻殻を纏った女の声が響き渡る。その声色は怒りと、焦燥が混じっている。

先ほどの通信で二つのきわめて重大な事実を知らされた。

一つは後少しでシステムを破られそうな事、そしてもう一つがそれを行っている通信塔が別に存在し侵入経路が複雑な事。必死になっても見つからないわけだ。

こちら側へのシステムハックを止めさせるには通信塔を探し出すしか無い。

やはり通信塔は要であろう。実際、マップを見ると本部の至る所から道が伸びて通信塔に繋がっている。

しかし、どうしてもたどり着かないのである。

理由が、魔山本部から送られてきた情報を映し出す表示枠エーデルに表示されたマップの通信塔へ続く道の殆どがダミーであったのだ。

表示枠フレームとは通信機器などから光のホログラムで空間に地図などを映し出す物で、最近開発されたシロモノだ。

映し出された表示枠フレームにはタッチする事も可能で、目印なども付けられる。

彼女の操作する表示枠にはマップの至る所に？×？印が記入されている。全てダミーであった道の場所だ。

正しき通路は、どこなのか。

~~~~~

サラの表情にも焦りが現れる。

『後少しだから……！』

届かない声を呟き、最後のセキュリティの壁を無効化するため、腕を伸ばしデータを送り込む。

古代叡知を使用したセキュリティの劣化版だからと言って余裕を持ってとっかかったのがいけなかった。突破した瞬間に作動する緊急セキュリティ、現代のプログラムに易々とひっかかってしまったではないか。

数秒で出来る最善策をとった。が、引き換えに場所のデータを持つてかれた。恐らくそのデータにダミーは張ってあるだろうが無いのと有るのでは大違いだ。

突破時間は後7分。リンや他の人たちには負担が多すぎる。少しでも早く、早く、

『早く……！』

~~~~~

私にだって考えはある。

あの時、確かに総司令官は電波で機能停止と言った。それは万一どうしようもなくなった時に魔女攻殻の情報を漏らさないためだ。

それは半分正しく、そして半分間違っていた。

裏で調査を進めたところ、この電波は攻殻停止では無い。そもそも、攻殻停止なんて存在しなかった。

存在したのは、攻殻パージと攻殻爆破。

万が一の事態に送った電波はその魔女攻殻を爆破し、情報漏洩を防ぐのと同時に軍へのダメージを与える。その使用者の命と引き換えに。

「……そんなの、私は認めない」

使えなかったら、捨てる。まるで奴隷のようではないか。

「……恐らく、制圧させた所で爆破するんでしょうね」

こうなる事は予測していた。

きつと、総司令官の目的は敵基地の占拠では無い。敵基地の完全消滅だ。

私と協力している？エーデル魔山？の情報通信担当が教えてくれた。  
スコート・リースト

斥候獣の集めた情報にはあらかじめ通信塔についても集めていた  
と言うのだ。

普通なら占拠後情報通信塔の制圧に向かわせるはずだが、あえて  
今情報が入って来たかのようにさせているのは何故だろうか？答え  
は単純明快。相手の基地内に散らばせた方が爆発の被害効率が上がる  
からだ。

「ただ一つの誤算。……それは、こちら側の通信担当の腕が思った  
以上の物だった事」

総司令官だつてまさかセキュリティをあつさり破られるだなんて  
思ってもいなかっただろう。

そのせいで、さらに事態は嫌な方向へ転がって行った。

あの総司令官ならハッキングされる前に爆破を仕掛けるはずだ。  
速く、見つけて止めさせなければ。

「でも、目処はついてるのよ」

目の前には隠し扉であつた壁がある。

壁に手を掛け、ゆっくりと押し込み、そして手を離す。押した部  
分の壁が通路側に飛び出し、隙間が出来た。ここまでは他の魔女た

ちも調査済みだ。そして、この奥部までも探索したはずだ。

「……普通は、見つからないわよね」

隙間に入り、何かを求めて手探りで床を調べる。

「……………あったわ」

小さな仕掛けを作動させると、取っ手が現れた。

「床下なんて、普通は気づかないわよね」

取っ手を持ち上げ、地下に潜入して行った。

~~~~~

エラが唐突に呟いた。

「現在位置がバレたわ。本通路こっちに入り込んだ奴が居る」

エラの手元にある携帯端末（妙に大きい）の画面には地図と朱い点が描かれている。入り込んだ敵が朱い点で、確実にゆっくりと移動している。

「まずく無いですか!？」

「まずいわ。……ちよつと足止めしてきてくれない？」

さらつと言うけど、武器も何も無いのにどうしろと。

「対人戦術ぐらい習得してるでしょ？」

「まあ一応は……って相手が銃器系統持ってたらどうするんですか……」

「あ、そうだよね……」

その時だ。

「おい! ヤベェ状況になっちまった!」

アクティスがキーボードを叩き声を荒げた。続き隣のイド、そしてウィルまでも同じ事を言い出した。何だよ立て続けに!

「相手の装備している攻殻には爆破装置が付いているんだが、……後2分で作動する」

つまり、

「……後2分で基地が吹き飛ぶって事さ」

引きつった顔で説明してくれた。

「サラ！」

僕は彼女の名を叫ぶ。
きつと、届くはずだ。

~~~~~

？シェリール・オルフェオン！聞こえてる！？攻殻爆破カウント  
ダウン始まってるわよ！？

「分かってるわ……！」

表示枠に映る通信担当に答え、私、シェリール・オルフェオンは  
暗い通路を走り抜ける。

時間が無い。このままでは向こうの意のままとなってしまう。そ  
んなのは絶対に許さない。

私の妹を実験台にしたあの男を、私は絶対に許さない……！

~~~~~

私に残された時間が少ない
あと少し、あと少しで最後の壁が突破できる。しかし、

『時間がギリギリ……！』

突破時間と爆破時間が同時刻である。

同等ではないけないのだ。突破したところで爆破されてしまいデッドエンドを迎えてしまう。だから、

『少しでも早く……！』

しかし、その焦りは時間短縮を妨げる。
一向に差が縮まらない。

無情にもカウントダウンは過ぎていく。
残り、10秒。

『……ッ！』

9秒

腕を突き込む。

8

壁が光る。

7

髪が靡く。

6

足が踏み込む。

5

その時だ。

4

私には聞こえた。

3

?サ
ラ
ア
ア
ア
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
！
？

2

彼の声が。

私には、彼^{リン}がいる

『……はあああああああああああ！！』

1

ラストセコンド
最後の1秒間で、私は為すべきことを為す。

0

~~~~~

基地爆破予定に思いもよらぬ邪魔が入り怒り狂った総司令官は爆破装置を予定よりも早く作動させた。もちろん司令部は騒然。様々な声が飛んで来たが聞く耳なんて持ってない。

そして、予定より早く、待望の瞬間を迎えた。

巨大なスクリーンには、残り0秒の表示。

待望の瞬間。

誰もが絶望し、一人の男が望んだ瞬間だ。

攻殻爆破、残り0秒。

「これで終わりだ！」

総司令官は叫び、高らかに、そして残酷に笑った。

?—————?

放送に、ホワイトノイズが入る。  
降伏勧告か？馬鹿め、もう遅い。

?————あー……あー、あ、入ったわね放送？

「……？」

こんな声は聞いた事も無い。

?聞こえてるかしら『魔山』<sup>エーデル</sup>の人たち？

~~~~~

?あんた達よくも私達の所に夜中に奇襲とやってくれたわね。しかも真っ昼間から堂々とスパイまで送り込んで更に監視塔の制御も奪ったりして。でも、もう遅いわ。私達が此処の制御は乗っ取った？

サラは告げる。

？危なかったわ。魔女攻殻の爆破による基地の消滅が魂胆だとはいえすがに焦ったわ。だけど、そんな事はさせない。確かに、基地の防衛もそうなんだけど、もっと重要な事だわ？

それは、

？人の命よ。おかしいんじゃないの？そんな人の命を奪ったてまでもそんなに基地を潰したかったの？人の命がどれだけ重たいか分かっているの？？

~~~~~

「……おいコウキ、この女の声誰だ？」

「し、知らないッス」

捕まったリーダーとリンの親友、コウキは小声でばれないように会話をする。

その間にも放送は続く。

？ふざけんじゃないわよ。人の命を顧みずに命令を与えるなんてゴミにも満たないわ？

〴〵〵〵

「……………出過ぎた真似をしたわ。失礼。で、どうやらこの作戦は上層部に許可を取らず個人の判断で行っているようね。今頃この放送も上層部は聞いているんじゃないかしら？きっちりみっちり報告させてもらうわ。奇襲と人員の消費、魔女攻殻に爆破機能の付加。そして……………」

一拍の間をおいて

「…この攻殻の強化の為に、一人の命が失われた事？」

〴〵〵〵

「……………」

床から音が響く。

扉を蹴り飛ばし拳銃を構えた彼女が、銃を落した。

「……………どうして……………」

そのまま足の力が抜け、床に座り込んでしまう。

「……………どうして……………！」

耐え切れなかった。

長い黒髪が顔を隠し、手が顔を覆う。

その両手の隙間から流れ落ちる、涙。

「……………私の妹は……………どうしてなの……………！」

この世は、理不尽だ。

僕は、リンはそう思う。

~~~~~

その後、この戦闘は幕を閉じた。
双方とも被害は少量。扉がひしゃげたりなど軽い物だった。これ

からは上層部同士の話し合いだ。軍事力の出番はもう無いだろう。

~~~~~

「……！」

気づいたら、私はベッドの上で寝かされていた。  
私はあの時……

「起きた？」

掛け声が私の思考を停止させる。  
顔を横に向けると鼻にティッシュを詰めた女の子がいた。鼻血で  
も出したのだろうか。  
まずは……

「……ここは何処？」

「えーと、医務室かな」

「医務室？」

「あ、うん」

とりあえず、上半身だけ起こして状況を確認しよう。

「あ、あああまだ寝てていいよ！まだ寝てて！体に悪いし！むしろその方が！」

「え、ええ……」

凄い必死に止められた。

別段何か企みがある訳でも無さそうなのでそのまま横になる。

さて、私は……

「私は……どうなったの？」

「え、えーとね……逆にどこまで覚えてる？」

「確か……放送を聞いた所まで」

「あ、ちゃんと覚えてたんだ。よかったよかった」

彼女は鼻栓したまま笑顔で答え、次の事を話してくれた。

あの総司令官は良くわからないが様々な罪で解雇させられ、永久追放されたらしい。

そして、その指揮下についていた機械魔女部隊は解散となり、『マシンスフロレン魔山』残る者もいれば、親の元へ帰る者もいるし、別の軍を求めて旅に出る者もいた。

今、『エーデル魔山』は新しい人が指揮を執っているが、今度は信頼できる人を直々に上層部が指名し、上層部が一から知識を叩き込んだか

ら大丈夫だろう。

「……で、君の待遇なんだけどさ……」

多分、放浪の旅かまた『エーデル魔山』に引き取られるかだ。

私には、親が居ない。死別した。

私の親は探検家で、どこかに出かけてはいつも面白い話を聞かせてくれた。

ある時、予定の日時から一週間過ぎても帰って来なかった。

それから3日過ぎた頃、別の人（親と同じ隊員）が訪れ、親が最後に見つけた『物』と、親の死を知らされた。

見つけた『物』は続に？魔女攻殻？と呼ばれる武装になったのだ。

一私一達は生きるために軍に入ったのだ。

「……軍に戻るくらいなら、私は旅に出るわ」

軍のせいで、私は愛する妹を失った。もう、嫌なんだ。

「いや、それなんだけど……」

私は信じられないことを聞いた。

「……うちの方に入らない？」

「……え？ちよっと待って。入るってどう言うこと？」

「いや、そのまんまだけど……あ、これ」

封筒を渡された。

表にはシェリール・オルフェオンと私の名前があり、差出人は

「<sup>エーデル</sup>魔山上層部代表……」

上層部の、しかも代表直々からの封書だ。

？この度は総司令官が迷惑をかけた。謝罪しよう。さて、今回は君の待遇に関してだが、結論から言うと、君の奇襲先の基地で働くか、それ以外をとってもらおう。尚、前者はもちろん上層部同士の合意の元だ。

理由は幾つかあるが一番大きな理由として、我が『<sup>エーデル</sup>魔山』との関係だ。何のことかはわかるだろう。君には重いと判断した。それは向こうも一緒との事だ。そこで、この提案がなされた。我が上層部としては君の意見を尊重したい。が、私個人の意見を述べると戻らずに新たに軍につくのも悪くは無いと思う。

伝えることは以上だ。決まったらこの手紙を渡された少年に伝えてあげてくれ？

「……」

新たに歩んでも悪くは無い、か。

フィンディーヌ<sup>妹</sup>も、言ってたわ。新しいことは楽しい事だって。

……やってみようかしら。

「……決めたわ」

ベットから起き上がり、宣言する。

「……此処でやって行くわ」

「そう。……それで良いんだね？」

「ええ」

外を見ている彼女に、私は言った。

~~~~~

「あの……」

私の意志を伝えた後、彼女は緊張気味に口を開いた。

「何かしら？」

「……情報通信塔の扉を蹴っ飛ばして入ってきた人だよね？」

「え、ええ。……あ、貴女はあの時の……」

「そ、そうなんだけどさ……」
「？」

「……ど、どうして服を着てなかったのかなあーって」

言われて視線を落とす。

「ひゃん!？」

何も着ていなかった。
まさか……

「あ、あのね、これは……攻殻をパージしたら全部ね……」

「あ、ああ……爆発したらまずいもんね……」

今になって違和感に気づいた。
嫌な予感が……するわ。

「……まさかとは思うけど、あなた、女よね……？」

「……………」

長い沈黙の後、口を開けた。

「……男」

顔を真っ赤にして彼女、いや、彼は答えた。

つまり、私はあの時堂々と裸を男の前にさらしたと言うことになるので、

「……いやあああああ！」

~~~~~

後日、正式に彼女、シェリール・オルフェオンは入隊となり、リ  
ンやコウキと同じ部隊に所属する事になった。

サラがオーバーヒート気味で休んでいる間、彼女の入隊を祝った。  
軍とは思えない雰囲気戸惑っていたが、次第に慣れてきたらし  
い。

最後に、感想を聞いたら、

「本当に軍なのか謎だわ」

でも、楽しいと最後に笑顔で付け足して答えてくれた。



### 3－5話（後書き）

終わり方がちょっとアレでした

## 4-1話（前書き）

今話の主な登場人物

リン

女と間違えられやすい本作の主人公。

ひょんなところから謎のデータ体？サラ？と行動する  
今回は鉱山で大はしゃぎするかも

サラ

リンの携帯端末や武装『ステラスフォーム』にいるデータ体のヒロ

イン

ほぼ人間と変わらない思考を持つ

鉱山でも大はしゃぎするかも

コウキ

リンの親友。結構勘が鋭く、時々自爆するよくいる男

シェリール

前話で入隊した黒髪の女。通称？黒魔女？

一見冷たい感じがするが、それなりに周りに合わせるスキルを持っている

リーダー

何かと頼れるリンたちを束ねるリーダー

名前は（ry

## 4－1話

物事には、訳がある。

そう、僕たちがこんな所にいるのも――

「……へっくしゅん！」

「一面真っ白だな……」

「白銀とはこの景色の為にあるみたい……」

僕は二人の言葉に同意する。

目の前の景色は一面白銀の世界。空からは降りゆく白。雪に覆われたこの地域の平原は絶景としか表現できない。だけどさあ。

「あの、寒くないの二人とも？」

二人が合図も無しに息をぴったりそろえて、

「厚着しすぎだ」「さすがに暑くないのかしら？」

それでも寒いぐらいだよ！

さて、寒冷や雪なんぞに縁がなかった僕たちがなぜここにいるか  
と言うか順に説明を追って行こう。

~~~~~

それは依頼と言う形でやって来た。

突然僕たちの部隊長がお偉いさんから呼び出されたのだ。

さすがに部隊長も焦っていたが、何もエロ本隠していただけで呼び出されることは無いだろう。

僕たちがあれこれ部隊長の話をしていたら、二十分ぐらいして帰って来た。

陰鬱な顔で向かった部隊長が、複雑な顔をして帰って来た。

「なんだかな……旅らしいぞ」

は？

「なるほどね。……雪山の鉱山が原因不明の崩落を起こしたと」

「その救援を行えば良いわけね」

話は見えた。

何やら北の方の国の鉱山が謎の崩落を起こして鉱山で働いている人たちと連絡も取れないし脱出が無理に近い状況だと言う。

そこで、僕たちのところに舞い込んできたわけだ。

「……そもそもどうしてここに依頼し、どうして俺達の部隊なんだ？」

「ステラスフォーム、だったかしら？あの機械装甲の作業が速いと判断したのじゃ無いかしら」

じゃまたまたどうして僕たちの部隊に？

「そこまで私は知らないわよ」

「あーそれなんだが……他の部隊が別んところではっちゃけてるらしいからこっちに回って来たらしい」

らしいらしいってすごいあやふや……

『この地域からは良質な鉱石や、今研究中的アイン・メタロ機鉱石も取れたりするのよ。機械関係の発達が著しいここでは、何としてでも救援してあげたいところなのよ』

アイン・メタロ
機鉱石。

最近注目されている新しい鉱石だ。

発見されたのは意外にも結構前なのだが、当初は？ハズレ鉱石？とか？ゴミ鉱石？と呼ばれていたりして捨てられていた物だった。

ある時、物好きな学者だか誰だか知らないけど、ゴミ扱いされて

いた鉱石について熱心に調べていたらこの鉱石は周りの鉱石に反応し硬度を高める事が分かったそうだ。

実験と共にそれを証明し、機械に少なからず影響をもたらした科学者、つくもまぢや？白昌也？

僕たち軍をやってる人にとっては耳にしてない人は居ないほどだ。

おっとお話がそれました。

「つまり、こことの関係を保ちつつ今後の発展のためにも行けと言うことだね」

「……お、おお。そういう事だ。出発は三日後。それまでに準備しとけ。いいな？」

「「「はい」」」

〃〃〃〃〃

「明日からだな」

「そうだね。とりあえず、鍋も食べたし後は明日に備えて寝るだけかな」

「……何で私男と一緒に部屋なの？」

ごもつともな質問でございます。

今回僕たちの宿泊施設にホテルが案内された。いやあ、嬉しいねえ。

そして夜ご飯がこの国の名産をふんだんに使った鍋であった。雪国の野菜や魚、肉がおいしかった。特に寒い地域であるため家畜は結構太らせるらしく、そこでついた脂身のある肉がとてもおいしかった。

温泉にも入り、露天風呂を楽しんで寝るだけとなった。

さて、そこまで贅沢できるのはやっぱり訳があつて――――

「……………」

何て理屈を通せるわけも無く、黙るしかない僕であった。

いや、だって、目が怖いんだもん……

「いや、リーダー隣の部屋でさ、下見で疲れて帰って来るわけよ。それで早く寝たいわけよ。そんな中俺達がバカ騒ぎして妨害したら意味無いわけよ。だから今回一人で静かに休んで欲しいと言うわけよ」

いや何でうち上げてんの!?

「……それもそうねえ……」

いやいや何で納得しちゃうの!?

「ベッドが二つで布団が一つだからなんとかなるな。うっしここはジャンケンで————」

「……ジャンケンだけでは運で決まってしまうわ。ここはトランプで勝負よ」

「……え、ええっと……」

展開! 展開早い! ついて行けない!

「よしオーケーだ。ババ抜きで異論はないな? ジョーカー残った奴が布団だ」

そういう事になってしまった。

既にトランプが配られている。もう腹をくくってやるしかない!

『結局意気込んでるわね』

ちゃっかり口挟むな!

~~~~~



布団行きは、予想済みと聞かれればそうと答えられるが、やっぱり言い出しっぺのコウキになった。  
さて、もう十一時だ。そろそろ寝よう。

## 4-2話（前書き）

今話の主な登場人物（前回のコピペ

リン

女と間違えられやすい本作の主人公。

ひょんなところから謎のデータ体？サラ？と行動する  
今回は鉱山で大はしゃぎするかも

サラ

リンの携帯端末や武装『ステラスフォーム』にいるデータ体のヒロ  
イン

ほぼ人間と変わらない思考を持つ  
鉱山でも大はしゃぎするかも

コウキ

リンの親友。結構勘が鋭く、時々自爆するよくいる男

シェリール

前話で入隊した黒髪の女。通称？黒魔女？

一見冷たい感じがするが、それなりに周りに合わせるスキルを持つ  
ている

リーダー

何かと頼れるリンたちを束ねるリーダー

名前は（ry

## 4－2話

「――――」

三日月が窓から見え、星が輝く。

いつものくせで起きてしまった。

時々あるよね。夜中に起きる事って。

しかも眠気がなぜかバツチり覚める時って。

「参ったな……」

いくら布団にもぐりこんでも寝れそうにないので、寝巻のまま布団から這いずりでる。

温かめの寝巻を持ってきていて良かったと思う。いや、めちゃくちゃ寒い。

時刻は夜中三時半。草木も眠る丑三つ時から約一時間。もう寝ても意味が無い気がする時間帯だ。

朝食まで猶予がある。

いやなんか別の方向に逸れてる気がするけど気にしない。

「……そうだ、外に行こう」

この部屋の気温から考えて外はありえないほど寒いはずだ。最低限の防寒着を着て、部屋を後にした。

~~~~~

当たり前と言えば当たり前だが、こんな時間に門があいている訳が無い。

結局上の階の展望台（つばい）ところに向かった。

「……うわぁ……………」

夜も、また壮観だ。

昼のは太陽の光が白を反射させ、大地の色を際立たせてくれるものだった。

今はどうか。

三日月の光の照らす大地が淡く白く輝いているようにも見え、それが夜空のスクリーンに散りばめられた星々を一層引き立ててくれる。

昼は力強く、夜は儂く、と言った光景だ。

そのまま、どれだけの時間が過ぎただろうか。

「夜もまた凄いわね」

「あ……こんばんは、かな」

「ええこんばんは」

隣には、？黒魔女？シェリール・オルフェオンが。

~~~~~

「こんな夜中にどうしたの？」

「黒魔女の朝は早いだよ。逆に私が聞きたい位だわ」

「そう言われてもねえ……」

ただ起きちゃったとしか言いようがない。

彼女はその答えに特に何も言わず、ふと東の方角を指さした。  
そこには、大きな山がある。

「アレが。今回行く鉾山よね」

「そうだね。……この寒い時期だから、凍死だけはして欲しくない  
な」

「それはきつと無いわ。防寒具ぐらい持って行っているはずよ……」

結局は推測にすぎない。

何が起ってるかは分からない。

それが凍死なのか、もっと別の事なのか。

「……………」

「……………」

その時だ。

光、を感じた。

「あっ………」

シェリールが声を漏らす。

僕も声を漏らしていたに違いないだろう。

山から、朝日が差し込む。

それは一日の始まりの合図。

夜明だ。

「……つくしゅん！」

そして、一番気温が低い時間でもあった。

~~~~~

早朝。

夜明から二時間も立ってない。

僕たちはすでに機動殻『ステラスフォーム』を装備しており、鉱山の入り口の前で整列している。

僕やコウキ、シェリールに他のメンバーの前にリーダーが立ち、これからやる事の説明が始まる。

「うっし、皆居るな？これから救出作業に入る。本当は昨日の夜から行うつもりだったが、なにぶん気温の冷え込みが激しくてこの機動殻自体が凍るかもしれないぐらいだったからな。その遅れの分、全力で救出作業をしろ。時間が生死の境目を分ける。迅速かつ的確かつ全力に、だ。主な分担は俺とシェリールで指揮を執る。他は全力で岩石を退け、途中から保護用毛布など物資救援に半分ほど回ってもらう。いいな？」

若干早口だが内容は理解した。

死ぬ気で岩石どかして死ぬ気で物資救援をしろ、と言う事だ。

「シェリール、お前は鉱山内を飛び回ってお前の判断で指揮をやってくれ。俺は一番キツそうな場所につく。なに、大丈夫だ。俺が保証する」

「何の保証か知らないけど任されたわ」

シェリールは機動殻『ステラスフォーム』を配備されていない。

その代り、元々所持していた魔女攻殻『フローレンズディバイス』を元専属のメカニックに直してもらい、それを使用している。

装備するタイプなのでパワー性能は劣るもののその機動力と小回りを生かした機殻^{カウリング}による高速飛行が可能で、現在偵察も引き受けている。

適材適所、をリーダーは意識したのだろう。彼女に各場所で指揮を執ってもらう事にしたのだ。

「それじゃあ、行くぞ！」

答えはもちろん、

？おう！？

~~~~~

作業は順調に進んで行った。  
シェリールの冷静で的確な判断が功を成し、早く一段落が付きそうだ。

「ふう……作業大変だね」

「機械越しだけだな」

コウキは苦笑で返してくれた。  
おっと、

「さんきゅー」



手を挙げ上から落ちてくる水筒をキャッチ。  
見上げれば、シェリールが箒に乗って降りてきた。

「お疲れ様」

「指揮執りお疲れ。順調？」

「まあそこそこね。今二か所岩石除去終了したから別の場所に回ってもらうように指示したところで休憩って感じ」

「なんつーか……俺みたいな馬鹿には出来ねえ仕事だなあ」

コウキが笑いながら言った。

僕やシェリールもつられて笑ってしまう。

手ごろな岩に腰掛け、束の間の休息を補給していた時だった。  
唐突にリーダーが神妙な顔で割り込んで来た。

いつもと違う雰囲気には僕は戸惑う。

数十秒の間空白が続いた。僕はちょっと焦って気を取り直し用件を聞いた。

「それなんだが……三人……ちょうど良い」

一人リーダーが思考し納得したところで話してくれた。

この崩落の原因は判明してないが、局地的な？揺れ？が発生しているとの事だ。

初めは地震かと疑っていたらしいけど、それがリーダー自身が身

を持って何度も体験したそうだ。

さらに、崩落の振動で一部穴が開いた場所があり、リーダーはそこが原因だとにらんでいる。

調査をしたいのは山々なんだが、今日中に現に掘っていた場所まで復活させなきゃいけないらしいので手が回せない。

「そこで僕たち、と言う訳ね」

「ああ、出来ればお前たちに頼みたい」

「了解です」

僕たちは引き受ける事にした。

『……嫌な予感がするわ』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7154v/>

---

古代機械と現代時間

2011年11月3日22時11分発行